

戦略的たむろ計画 —地方都市における余白の私的領域化の提案—

STRATEGIC PLAN FOR HANGING AROUND

-Design Proposal to Convert Local City's Margin areas into Being Self Centered Spaces-

佐倉研究室 20T5004A 稲葉大将

Sakura Lab. 20T5004A Daisuke INABA

キーワード：
地方都市, たむろ, 私的領域, 住民主導

Keywords:
Local city, hang around, Self Centered Spaces, Community-Led

1. はじめに

1-1. 背景

地方都市の公共空間の「公共」は、本来の意味で公に共有されたものになっているのだろうか。近年、地方都市では再開発によって、老朽化した建物を建て替え、不足する機能を追加し便利な暮らしの基盤を整備している。一方、再開発の一環として路上や公園などのまちなかの公共空間に対し、禁止看板によりきせいされた過ごし方や屋内空間に規制された活動の場があてがわれる¹⁾など、過ごす場は矯正され抑圧的な社会へ近づき、まちの魅力が損なわれている。

抑圧的社会に対し、笹尾はPublic Hack²⁾を掲げ、都市を私的に自由に使うことを通して、生活の質の向上、及び社会に質の高い多様性の保有、まちの価値の向上などの有用性を言及している。

このような公共を恣意的に使う行為として、路上ライブや道端に座り込む行為などの総称である「たむろ」が存在する。たむろは、抑圧的社会が強い画一的な過ごし方に抗い、好きなように過ごすために、自ら居場所を見つけ、私的に都市を利用している。たむろは、利用者を主体とした都市の在り方の象徴的な行為とみることができるのではない。

1-2. 本提案におけるたむろの定義

広辞苑において、たむろは「仲間やある職業の者が集まること」と記されている³⁾が、一般的には不良が集まる状態のような、周りに迷惑をかける行為として使われている。しかし本設計では、たむろをこのような負のイメージでなく、抑圧的社会に対しまちなかにある余白を私的に扱い、過ごす行為（本提案では「自己本位的ふるまい」と呼ぶ）に焦点を当てる。都市を私的に使うという点において、自己本位的ふるまいを好意的に評価し、まちなかにある余白の設計手法に応用する。

1-3. 方法と目的

本提案では、自己本位的ふるまいを都市を私的に使う行為の模範として位置付ける。自己本位的ふるまいの経験と観察による調査、及び得られた結果を分析し、自己本位的ふるまいを複数の要素に分解する。分解した要素を建築的視点から考察し、再構築することで、「たむろ的設計手法」を導くことを目的とする。自己本位的ふるまいは本人の内面からの衝動から生じる行為であり、たむろ的設計手法はそれらを建築空間に取り込むための設計手法である。

地方都市は、再開発による都市空間の整備によって、無自由な場になりつつある。本提案では、再開発が進行中の地方都市：長野駅善光寺口側周辺を対象に、私的にまちを扱う行為である自己本位的ふるまいに着目し、構成要素を明らかにし、設計手法として再構築することで都市の余白空間に対して、人間主導の場を計画する。再開発の流れから取り残された余白やものを私的に利用するための設計手法を提案する。

2. 対象地概要

本提案では、再開発が進む地方都市にある、抑圧的な社会に近づきつつある長野駅善光寺口側周辺を対象敷地とする。

2-1. 公共空間の過度な活性化

「長野市における再開発事業のあゆみ」⁴⁾によると、長野市は市街地の魅力向上を目的とし再開発を進め、2021年の6月1日までに計38軒の高層ビルが建設され、多様なジャンルを網羅した便利な都市として整備が進められている。一方、スケートボードや喫煙などの生活行為から外れた過ごし方は排除されている。これら排除行為は、当初の目的である市街地の魅力向上に矛盾していると言える。

2-2. 自己本位的ふるまいの存在

長野駅前では、階段に座り話し込む姿や駅のロータリを車の展示場として転用する姿など、多数の自己本位的ふるまいがみられる。また、キャッチや許可のない路上ライブなどの違法行為も観察されたが、周囲は容認し、駅前の活気を支える要素の一つとなっている。

2-3. 都市構成の分析

長野市は、民衆の心のよりどころである善光寺と山から流れる水路を考慮して都市が構成されている。善光寺を起点にグリッド上に主要な通りが計画され、川の流れてに添うように幅の細い道が大きな道をつなぐように張り巡らされている。長野市の玄関口である長野駅は、善光寺の正面から外れるように建ち、主要な道をゆがめている。結果、道に沿って立つ建物の裏に生まれる空地や鋭角に折れる場を集積するものなど、不明確な余白^{注1)}が多く存在している。また、再開発に伴い、高さ方向にも余白を見出すことができる(図1)。



図1 長野市再開発実施地区⁴⁾と不明確な余白

3. 自己本位的ふるまいと建築の関係

3-1. 自己本位的ふるまいの構成要素の抽出

対象敷地内における私的に都市を使っているふるまいの観察、及び経験を通して、自己本位的ふるまいを抽出する。そして、KJ法を用いて、行動をパターン化し、自己本位的振る舞いが起こるきっかけを抽出する(図2)。自己本位的ふるまいは、周辺にあるものや建物を作る環境を選び、その場にあるものをハードとして活用することによって、余白を私的に使っていることが分かった。

3-2. 自己本位的ふるまいと建築の類似性

建築的視点から自己本位的ふるまいを考えると、意匠はふるまいを叶える空間、構造はふるまいを支えるハード、環境は滞在できる居心地のいい周辺環境と読み替えることができる。これらのことから、自己本位的ふるまいは建築と親和性が高いと考える。

4. 都市風景を構成するものの分析

4-1. 都市風景を構成するものの抽出

3章より、自己本位的ふるまいはものをきっかけとしておこる場合が多いことが分かった。4章では、人とももの関係に着目し、対

象敷地の道(全84件)に対して、調査シート(図3)を用いて調査し、人ともものがつくるハードと空間特性を分析する。

4-2. ものと人間スケールの関係

抽出されたものを個別に着目し、人間工学^{注2)}の4つの基本姿勢のうち、調査の中で見られた1.立位姿勢 2.椅座位姿勢を評価の基準として、スケールの比較を行う(図4)。もののスケールの違いによって、人のふるまいの選択肢が変化することが明らかになった。

4-3. ものが作る空間特性

空間は人の身体を踏まえて作られており、身体的に経験することを通して、空間を認識する。藤井ら⁵⁾が編み出した空間図式を用い、人とモノの関係をプロットすることで物を作る空間特性の類型化を行い、9つの空間特性に大別する(図5)。ものの分布と人の関係から、認識する空間の規模も変化することが明らかになった。



図3 調査シート

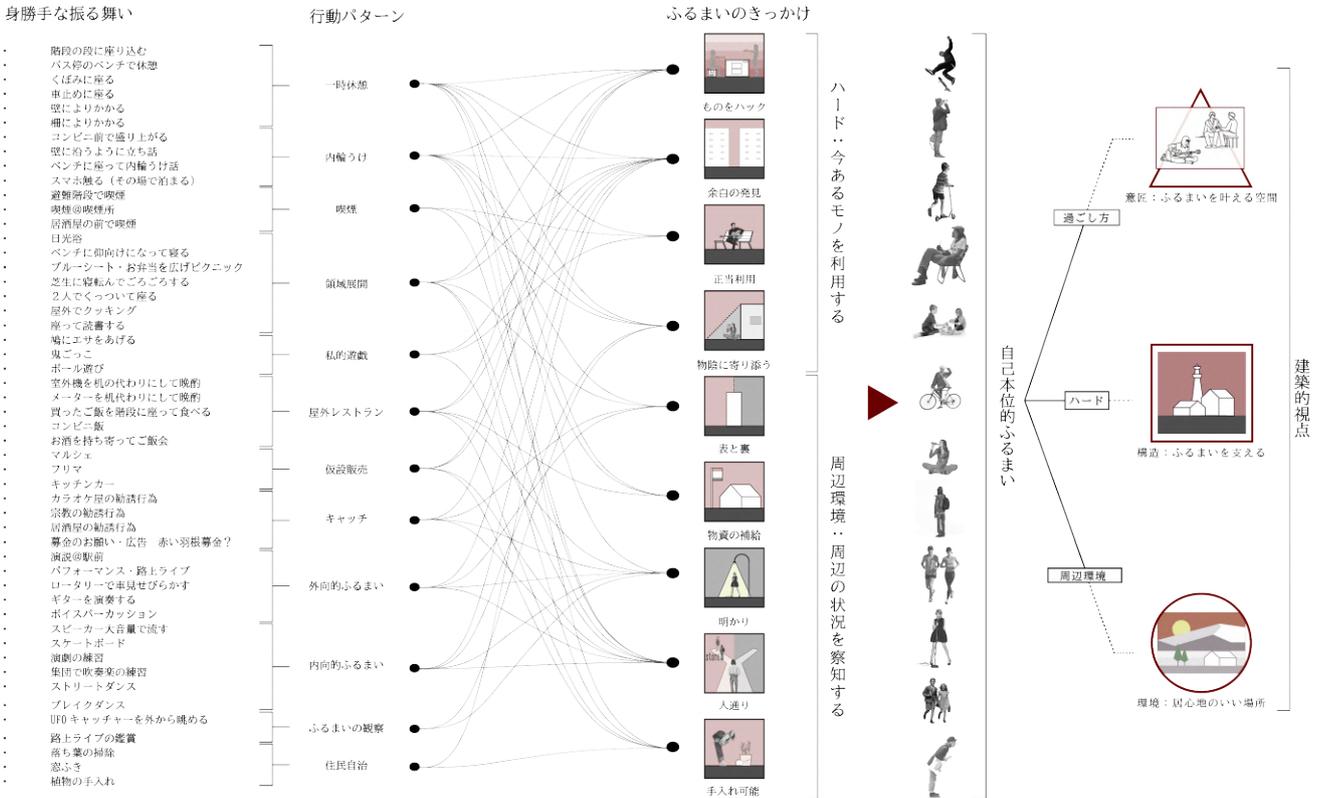


図2 自己本位的ふるまいの構成要素と建築との類似性

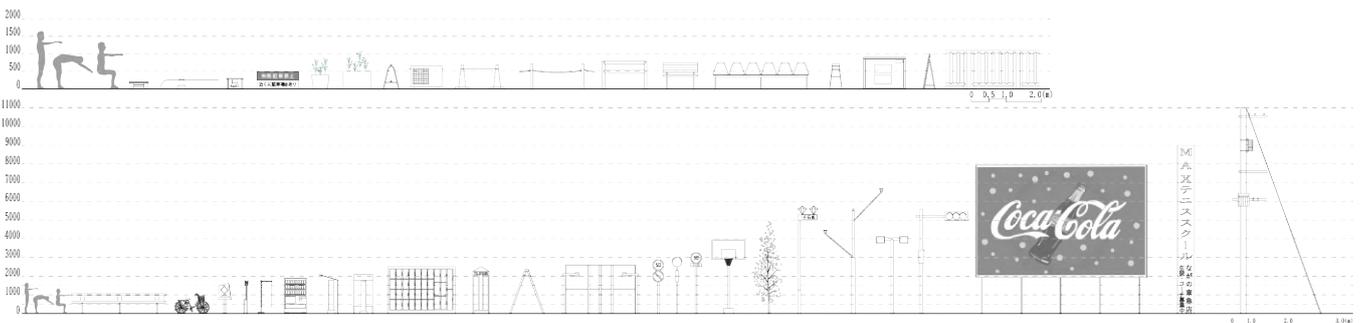


図4 ものと人のスケール関係(自己本位的ふるまい→ハード)

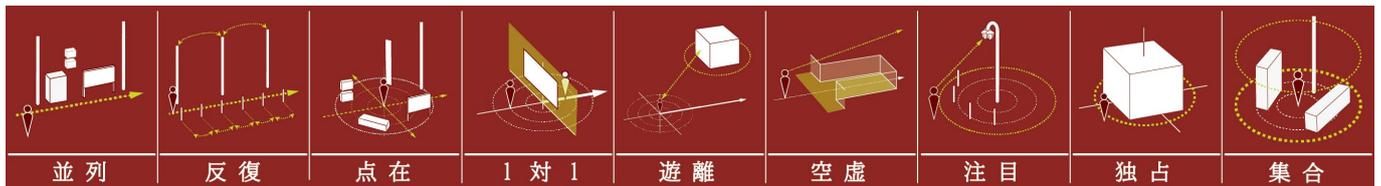


図5 ものが作る9つの空間特性（自己本位的ふるまい→周辺環境）

5. 設計提案

5-1. たむろ的設計手法

3章では自己本位的ふるまひは、過ごし方、ハード、周辺環境の3つの構成要素に分解できることを明らかにした。4章では分解した要素に対し、人ともののスケールによるふるまひの変化と人と周囲のもの分布によって作られる空間特性を明らかにした。たむろ的設計手法は、4章の内容を設計の手掛かりとし、3章の分解された3要素を再構築することで、1つのだむろい^{注3)}を計画する(図6)。

5-2. 9つの「たむろい」の設計 | 広域計画

たむろ的設計手法を用いて、9章より明らかにした余白における9つの空間特性に対して、特に空間特性の強かった場所を選定し(図7)、都市を私的に使うための場として9つの「たむろい」を提案する。9つのたむろいは、そこにあるものが作る空間特性に対し、周囲にあるものをハードとして利用しながら、恣意的に過ごすことのできる空間を計画する(図8、9)。

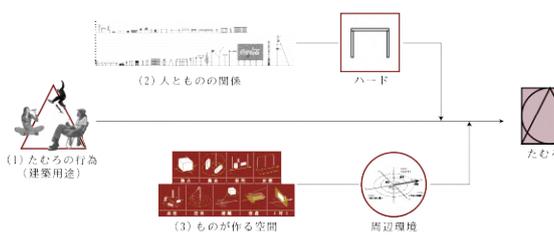


図6 たむろ的設計手法

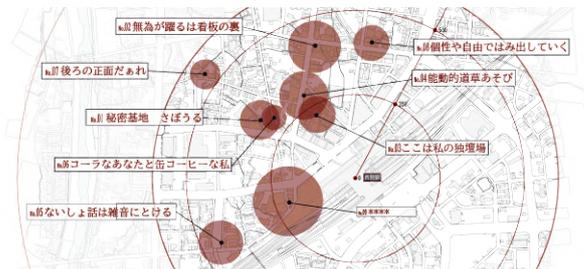


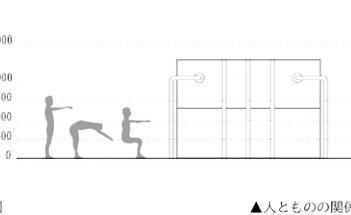
図7 広域計画 | 9つのたむろいの敷地選定



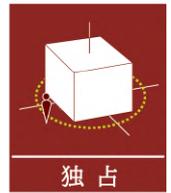
■たむろ的設計手法の要素



▲周辺環境 | 配置平面図



▲人ともの関係



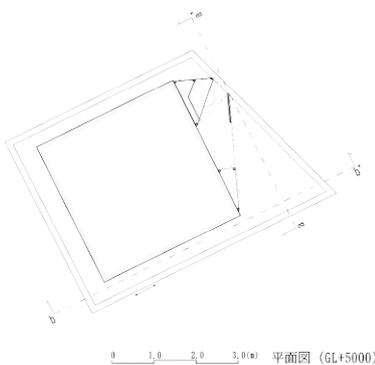
▲空間特性

■建築操作

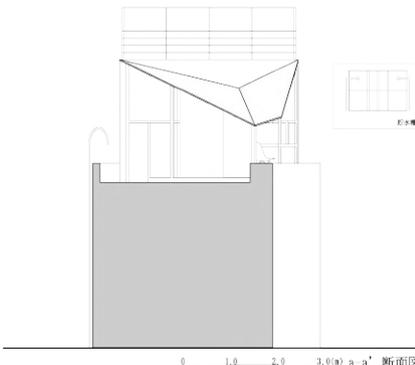
(3) ものが作る空間
ものが作る空間特性を強調する建築操作。

(2) 人ともの関係
存在感あるものの陰に隠れるように不確定領域を構想。

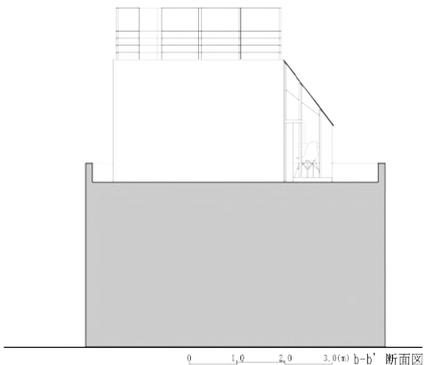
(1) 行い
行為と結びつきある空間特性を強調するような建築操作。仕事から逃げる場所として、趣味、睡眠を主な用途と設定。



0 1.0 2.0 3.0(m) 平面図 (GL+5000)



0 1.0 2.0 3.0(m) a-a' 断面図



0 1.0 2.0 3.0(m) b-b' 断面図

図8 「No.01 秘密基地 さぼうる」の建築操作



図9 たむろいで過ごす姿

6. 結

自己本位的ふるまいを分解し、再構築することでたむろ的设计手法を導くことができた。また、この设计手法を用いることで、まちなかの不明確な余白に対し、私的に過ごすことのできる場を提示することができた。本提案は、自己の内面から生じるふるまいや生産と消費の一方通行によって集積していくものなど、今あるものに着目し組み合わせ、余白にあるものに肉付けしていくことによって場を計画している。つまり、たむろ的设计手法を用いることで、人間の内面から生じる動機から、今あるものを組み合わせることで建築空間は構築され、都市は更新されていくと考える。

【参考文献】

- 1) 馬場正尊、Open A「RePublic 公共空間のリノベーション」株式会社学芸出版社(2013)
- 2) 笹尾和宏「PUBLIC HACK 私的に自由にまちを使う」株式会社学芸出版社(2019)
- 3) 新村出「広辞苑 第7版」岩波書店(2018) P1832
- 4) 長野市都市整備局市街地整備課「長野市における再開発事業のあゆみ」<https://www.uraja.or.jp/wp-content/uploads/2021/11/50-nagano.pdf> (2019)
- 5) 藤井晴行、篠崎健一「建築空間認識と創生における知識身体性顕現-空間図式研究」https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSJAI2017/0/JSJAI2017_4L13/_pdf
- 6) アトリエ・ワン「コモナリティーズ ふるまいの生産」LIXIL 出版(2014)
- 7) ヤン・ゲール、ピアギッテ・スヴァア/鈴木俊治、高松誠治、武田重昭、中島直人 訳「パブリックライフ学入門」鹿島出版会(2016)

【注釈】

- 1) 使われておらず、所有者も不明確な余白空間を指す。
- 2) 人間のサイズや動作、重量を数量的に捉え、空間設計に応用する科学を指す。
- 3) たむろ的设计手法によって計画された場と定義する。